

『病院内／免疫不全関連感染症診療の考え方と進め方 — IDATEN 感染症セミナー』

IDATEN セミナーテキスト編集委員会(編)

金沢大医学教育研究センター・リウマチ・膠原病内科 松村 正巳

IDATEN (Infectious Diseases Association for Teaching and Education in Nippon)こと日本感染症教育研究会から『病院内／免疫不全関連感染症診療の考え方と進め方』が出版された。待ち望まれた内容が記述・編集され、時宜を得た出版である。

医学の進歩は著しく、この四半世紀を検証しても、とくに治療における恩恵には目をみはるものがある。腫瘍性疾患、自己免疫性疾患、移植医療、クリティカルケアにおいて、以前には想像もできなかった病態の改善が得られている。しかし、この恩恵の背後には、時に想定していなかった新たな病態が潜んでいることがある。新薬の副作用、そして感染症、特に病院内／免疫不全関連感染症である。これは医学の進歩に常につきまとう普遍的な現象ともいえよう。

病院内／免疫不全関連感染症は、経験のある医師にとっても手強い相手である。なぜだろう。病院内感染症は本来起こるべきでない病態であり、時に想定外の事件として突然に訪れる。基本的なアプローチが理解され、実施されないと正しい診断・治療が難しい。免疫不全関連感染症が大きな障壁となり、われわれの前に立ちはだかる理由は、診断が容易でないこと、エンピリックに治療を開始せざるを得ないこと、治療薬の副作用が多く、時に重篤ですらあることによる。確定診断のために気管支鏡などの侵襲的な検査を要することがある。診断に至らないこ

ともまれではなく、薬剤の副作用が発現した時に、それを承知で最善の治療を継続できるかという重い課題を背負う。初学者の目には、道筋が見えない難題として映り、経験を積んだ医師にとってもストレスがかかる。

本書ではこれらの困難な課題に対し、極めて系統的なアプローチが示される。「内科病棟での発熱へのアプローチ」「肝硬変患者の発熱へのアプローチ」「免疫不全者の肺感染症へのアプローチ」など、われわれが日々遭遇する具体例が呈示され、おのおのへの対応が記述される。そして、読み進むうちに各論の根底を貫く法則に気付く。それは、1 患者背景、2 感染臓器、3 原因微生物、4 抗菌薬、5 最終的な治療方針という感染症診療の基本原則である。彷徨しているときは、実はこの基本原則に沿っていないことが少なくない。

病院内／免疫不全関連感染症診療は、もはや三次医療機関に限られたものではない。プライマリケアにおいても経験される。繰り返すが、病院内／免疫不全関連感染症は手強い。時の経過とともに病態の解釈・治療の変遷も観察されてきた。本書が多くの医療者にとって、現時点における最善の指南書となり、病を患う人の守護神になることを願う。

● B5 / 頁 328 / 定価 5,250 円(本体 5,000 円 + 税 5%)

2011 年 [ISBN978-4-260-01244-7] 医学書院刊